

$$x_{r+1} = \frac{\begin{vmatrix} p_{r-1} & r_{r-1} & \tau_{r-1} \\ p_r & r_r & \tau_r \\ p_{r+1} & r_{r+1} & \tau_{r+1} \end{vmatrix}}{\Delta_r} = \frac{k_{r+1} \cdot r_{r-1} \tau_{r-1} + k_{r+1} \cdot r_r \tau_r + k_{r+1} \cdot r_{r+1} \tau_{r+1}, \dots}{\Delta_r}$$

$$x_{n-1} = \frac{\begin{vmatrix} r_{n-1} & \tau_{n-1} \\ \tau_n & n_n \end{vmatrix}}{\Delta_n} = \frac{k_{n-1} \cdot n_{n-1} \cdot \tau_{n-1} + k_{n-1} \cdot n_n \cdot \tau_n}{\Delta_n} \quad x_n = \frac{\begin{vmatrix} m_{n-1} & n_{n-1} \\ m_n & n_n \end{vmatrix}}{\Delta_n} = \frac{k_{n-1} \cdot n_{n-1} \cdot \tau_{n-1} + k_{n-1} \cdot n_n \cdot \tau_n}{\Delta_n} \quad (4)$$

(表2)

	x_4	x_5	x_6	x_7	\cdots	x_{r-1}	x_r	x_{r+1}	\cdots	x_{n-1}	x_n	常数
T_1	$-d_1$	$-e_1$	$-f_1$	$-g_1$								$-m_1 - n_1$
T_2	$-d_2$	$-e_2$	$-f_2$	$-g_2$								$-m_2 - n_2$
T_3	$-d_3$	$-e_3$	$-f_3$	$-g_3$								$-m_3 - n_3$

(表1)

行番号 大字	方程式							右辺	方程式右辺		常数
	x_1	x_2	x_3	x_4	x_5	x_6	x_7		x_{n-1}	x_n	
(1) A_1	b_1	C_1	d_1	e_1	f_1	g_1		P_1	R_1	S_1	$m_1 n_1$
(2) A_2	b_2	C_2	d_2	e_2	f_2	g_2		P_2	R_2	S_2	$m_2 n_2$
(3) A_3	b_3	C_3	d_3	e_3	f_3	g_3		P_3	R_3	S_3	$m_3 n_3$
(4) A_4	b_4	C_4	d_4	e_4	f_4	g_4		P_4	R_4	S_4	$m_4 n_4$
(5) A_5	b_5	C_5	d_5	e_5	f_5	g_5		P_5	R_5	S_5	$m_5 n_5$
(6) A_6	b_6	C_6	d_6	e_6	f_6	g_6		P_6	R_6	S_6	$m_6 n_6$
(7) A_7	b_7	C_7	d_7	e_7	f_7	g_7		P_7	R_7	S_7	$m_7 n_7$
(8) A_8	b_8	C_8	d_8	e_8	f_8	g_8		P_8	R_8	S_8	$m_8 n_8$
(9) A_9	b_9	C_9	d_9	e_9	f_9	g_9		P_9	R_9	S_9	$m_9 n_9$
(10) A_{10}	b_{10}	C_{10}	d_{10}	e_{10}	f_{10}	g_{10}		P_{10}	R_{10}	S_{10}	$m_{10} n_{10}$
(11) A_{11}	b_{11}	C_{11}	d_{11}	e_{11}	f_{11}	g_{11}		P_{11}	R_{11}	S_{11}	$m_{11} n_{11}$
(12) A_{12}	b_{12}	C_{12}	d_{12}	e_{12}	f_{12}	g_{12}		P_{12}	R_{12}	S_{12}	$m_{12} n_{12}$
(13) A_{13}	b_{13}	C_{13}	d_{13}	e_{13}	f_{13}	g_{13}		P_{13}	R_{13}	S_{13}	$m_{13} n_{13}$
(14) A_{14}	b_{14}	C_{14}	d_{14}	e_{14}	f_{14}	g_{14}		P_{14}	R_{14}	S_{14}	$m_{14} n_{14}$
(15) A_{15}	b_{15}	C_{15}	d_{15}	e_{15}	f_{15}	g_{15}		P_{15}	R_{15}	S_{15}	$m_{15} n_{15}$
(16) A_{16}	b_{16}	C_{16}	d_{16}	e_{16}	f_{16}	g_{16}		P_{16}	R_{16}	S_{16}	$m_{16} n_{16}$
(17) A_{17}	b_{17}	C_{17}	d_{17}	e_{17}	f_{17}	g_{17}		P_{17}	R_{17}	S_{17}	$m_{17} n_{17}$
(18) A_{18}	b_{18}	C_{18}	d_{18}	e_{18}	f_{18}	g_{18}		P_{18}	R_{18}	S_{18}	$m_{18} n_{18}$
(19) A_{19}	b_{19}	C_{19}	d_{19}	e_{19}	f_{19}	g_{19}		P_{19}	R_{19}	S_{19}	$m_{19} n_{19}$
(20) A_{20}	b_{20}	C_{20}	d_{20}	e_{20}	f_{20}	g_{20}		P_{20}	R_{20}	S_{20}	$m_{20} n_{20}$

(表3)

	x_4	x_5	x_6	x_7	\cdots	x_{r-1}	x_r	x_{r+1}	\cdots	x_{n-1}	x_n	常数
T_{11}	$-d_1$	$-e_1$	$-f_1$	$-g_1$								$-m_1 - n_1$
T_{12}	$-d_2$	$-e_2$	$-f_2$	$-g_2$								$-m_2 - n_2$
T_{13}	$-d_3$	$-e_3$	$-f_3$	$-g_3$								$-m_3 - n_3$

(表4)

	x_4	x_5	x_6	x_7	\cdots	x_{r-1}	x_r	x_{r+1}	\cdots	x_{n-1}	x_n	常数
T_{111}	$-d_1$	$-e_1$	$-f_1$	$-g_1$								$-m_{11} - n_{11}$
T_{112}	$-d_2$	$-e_2$	$-f_2$	$-g_2$								$-m_{12} - n_{12}$
T_{113}	$-d_3$	$-e_3$	$-f_3$	$-g_3$								$-m_{13} - n_{13}$

(表5)

	x_4	x_5	x_6	x_7	\cdots	x_{r-1}	x_r	x_{r+1}	\cdots	x_{n-1}	x_n	常数
T_{1111}	$-d_{11}$	$-e_{11}$	$-f_{11}$	$-g_{11}$								$-l_{11}$
T_{1112}	$-d_{12}$	$-e_{12}$	$-f_{12}$	$-g_{12}$								$-l_{12}$

よつて、上述の式(1)より次の如き作表をなし機械的に操作を行う【表-6】(省略)

次に表-6において、係数の項の方程式(4)…(r), …(n)は表-1の方程式(4), …(r), …(n)の x_1, x_2, x_3 の項を消去し、 $x_4, x_5, \dots, x_r, \dots, x_n$ の係数に置き換えたことになり、 表-1の方程式(4), (5), …, (r), …, (n)の $x_4, x_5, x_6, \dots, x_r, \dots, x_n$ までと表-6(省略)の方程式(4), (5), …, (r), …, (n)の代数和をもつて表-1の方程式(1), (2), (3)と(4), (5), (6), …, (r), …, (n)までの x_1, x_2, x_3 が消去せられたことになる【表-7】(省略)

同様にくり返して、 x_4, x_5, x_6 と方程式(4), (5), (6)を消去し、 最後に未知数が3個以内まで行い最後の未知数が決定されたら、 順次逆に x_1 まで決定できるのである。(注) 本法では x_1, x_2, x_3 より消去を行つたがなるべく最初の行列式の展開に簡単のところより(1), (2), (3), (4)の性質を應用して消去を行ふを便とする。なお例題は軌条と地下鐵の問題をあつかう。

16. 方列による静定主系の決定法 (20分)

正員 山梨大学工学部 近藤繁人

土木學會誌第35卷第11號には一般代數式による不靜定値の選び方について述べたが、 ここではこれを方列によつて解く方法について述べる。

先ず n 次不靜定構造物の上の1點 i に $P_i=1$ が作用した場合には次式が成り立つ。

$$\left. \begin{aligned} X_a \delta_{aa} + X_b \delta_{ab} + \dots + X_n \delta_{an} - \delta_{ai} &= 0 \\ X_a \delta_{ba} + X_b \delta_{bb} + \dots + X_n \delta_{bn} - \delta_{bi} &= 0 \\ X_a \delta_{na} + X_b \delta_{nb} + \dots + X_n \delta_{nn} - \delta_{ni} &= 0 \end{aligned} \right\} \quad (1)$$

上式において X の係数を方列 [6] で表わせばこの方列は Maxwell の相反法則により 対称 方列である。すなわち

$$\delta_{ab} = \delta_{ba}, \quad \delta_{ea} = \delta_{ac}, \quad \dots, \quad \delta_{ji} = \delta_{kj} \quad \dots \quad (2)$$

次に n 個の不確定値 X_A, X_B, \dots, X_N を適當に選び次のような関係式が成り立つものとする。

$$\left. \begin{aligned} X_a &= X_{Af_{aa}} + X_{Bf_{ab}} + \dots + X_{Nf_{an}} \\ X_b &= X_{Af_{ba}} + X_{Bf_{bb}} + \dots + X_{Nf_{bn}} \\ X_n &= X_{Af_{na}} + X_{Bf_{nb}} + \dots + X_{Nf_{nn}} \end{aligned} \right\} \quad (3)$$

上式の X_A, X_B, \dots, X_N の係数を方程 [f] で表わすことにする。式(3)を式(1)に代入したときの X_A, X_B, \dots, X_N の係数を方程 [g] で表わせば

この $[z]$ にある係数を乗じて対称方列を作つた場合に、その方列の対角元素を 0 でないものとし、任意の j, k 元素をすべて 0 ならしめることができれば

$$X_A = \frac{\delta_{IA}}{\delta_{AA}}, X_B = \frac{\delta_{IB}}{\delta_{BB}}, \dots, X_N = \frac{\delta_{IN}}{\delta_{NN}} \dots \quad (5)$$

によって表わすことができる。

さて、 $[z]$ を対称方列に直すには、 $[z]$ の前に $[t]$ の共やく方列 $[f]$ を乗ずればよい。すなわち

式(6)のjk元素を全部0とおくことにより $X_A, X_B, X_C, \dots, X_N$ と $X_a, X_b, X_c, \dots, X_n$ の関係を決定することができて静定主系が定まることになる。この場合条件式の数は、 $n(n-1)/2$ 個できるので、fの中にもう含まれる未知量の数も、 $n(n-1)/2$ 個にしなければならない。例えば2次不静定のときは条件式1個で、fの中にもう含まれる未知量としては座標x, y又は方向角 α のうち1個を選べばよく、3次不静定のときは条件式3個で、x, y及び α の3個を未知量に選べばよい。なお又高次不静定のときは式(3)の[f]として

$$[f] = \begin{bmatrix} 1 & fab & fac & " & " & fan \\ 0 & 1 & fbc & " & " & fbn \\ 0 & 0 & 1 & " & " & " \\ 0 & 0 & 0 & 0 & \dots & 1 \end{bmatrix} \quad \dots \quad (7)$$

を選べば、 f の数が $n(n-1)/2$ となつて條件式の数と一致するのでこれらを決定することができる。式(7)は一般高次の場合であるから、2次・3次不静定の場合にももちろん適用される。

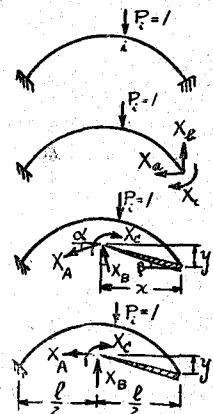
今一例として図のような両端固定左右対称の3次不静定構造物に対する静定主系を決定すれば

$$\left. \begin{aligned} x &= -\frac{\epsilon_{bc}}{\epsilon_{cc}} = -\frac{l}{2} \\ y &= \frac{\epsilon_{ac}}{\epsilon_{cc}} \\ \alpha &= 0 \end{aligned} \right\} \quad (8)$$

となる

本解法は充腹構造たると骨組構造たるとを問わずすべてこの構造物に對して適用されるもので、式(8)は兩端固定左右對稱のラーメン・アーチ・トラスのみならずフィーレンデールアーチ等にも適用される式である。

本研究は昭和25年度文部省科学研究費による研究の一部で、詳細は山梨大学工学部研究報告第2号に登載の通りである。



17. 等角寫像の近似的な方法 (20分)

正員 名古屋工業大學 岡 林 稔

流体力學や熱傳導、弾性力学等では等角寫像がかなり重要な役割を持っている。しかし、任意の閉面分を例えれば直線境界の半無限平面に等角寫像する寫像函数を求めるることはまず不可能に近い、多角形を半平面に寫像する